

利尻山登山路の石碑 - 利尻山岳環境史 (1) -

佐藤雅彦¹⁾・志摩 進²⁾・工藤浄真³⁾

¹⁾ 〒097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町 利尻町立博物館

²⁾ 〒097-0401 北海道利尻郡利尻町杓形字緑町

³⁾ 〒097-0311 北海道利尻郡利尻町仙法志字本町

Stone Monuments along the Trails on Mt. Rishiri, Northern Hokkaido - History of Mt. Rishiri (1) -

Masahiko SATO¹⁾, Susumu SHIMA²⁾ and Joushin KUDO³⁾

¹⁾Rishiri Town Museum, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

²⁾Honcho, Senhoshi, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0311 Japan

³⁾Midorimachi, Kutsugata, Rishiri Is., Hokkaido, 097-0401 Japan

Abstract. Nine stone monuments and two related item along the three trails of Mt. Rishiri are recorded with photos. The discovery of a Sanskrit letter on a large rock near the summit is among them. There are no other extant records of monuments inscribed with Sanskrit letters from this island. The letter stands for "Aizen-Myoô", one of the "Wisdom Kings" in Vajrayana Buddhism who is closely related to another Wisdom King, "Fudo-Myoô". According to ancient traditions (Yasuda, 1991), a Buddhist priest made a first trail up Mt. Rishiri in the late Meiji period and placed a wooden image of "Fudo-Myoô" in a small shrine on the summit. We propose that the Sanskrit letter might have been inscribed by the priest as well. This would be valuable evidence in support of traditions regarding the history of climbing of Mt. Rishiri.

利尻島内には様々な石碑が存在する（利尻郷土史研究会，1986）。しかし，利尻山に見られるものについてはこれまでその詳細な記録が体系的に残されたことはなかった。山中の古い石碑では徐々に碑文が読めなくなったり，登山道の変化などにより，その正確な位置や建立の経緯などが不明なままとなりつつあるものも多く，山体の崩壊が進む中，早急にこれらの記録を残す必要があると筆者らは考えた。そこで，2009年から2010年にかけて利尻山における現地調査および聞き取り調査などを行った結果，8個の石碑等と2個の人為的な加工がされている石を確認した他，これまで知られていなかったと

思われる石碑1つを新たに発見することができたのでここに報告する。

結果は「場所」「大きさ」「碑文」の順に示し，由来などがわかるものについては「備考」にて考察などを行った。なお，判読できなかった文字については■，改行は□で示した。調査対象は3つの登山ルート上（旧登山道も含む）に現存する石製のものとし，直接碑文が彫られていなくとも，明らかになんらかの標識などの土台として利用されていたと思われるものは含めた。なお，以下のものは本稿から除外した；1) 利尻山の谷や沢などにあるもの，2) 木製・プラスチック製などの石以外のもので主に作

られたもの、3) 過去に設置されていたと思われる石碑でも調査年に確認できなかったもの、4) 三角点、5) 山頂に設置された祠に奉納されているもの、場所については携帯型 GPS (eTrex Vista HCx, Garmin) を用いて計測し、世界測地系で記述した。

梵字の解読には三谷健容氏 (立正大学仏教学部仏教学科) にご協力をいただいた。三谷氏のご協力がなければ、今回の新たな発見はなかったものと思われる。中村順厚氏については北島俊生氏 (妙海寺) に資料のご提供をいただいたほか、利尻山の石碑については常磐井武祝氏 (利尻山神社)、古川恭司氏 (利尻富士町鴛泊)、鈴木祐尚氏 (利尻富士町本泊)、寺田昭一氏 (利尻富士町鴛泊) から貴重な情報提供をいただいた。また、現地調査では岡田伸也氏 (稚内自然保護官事務所・利尻アクティブレンジャー)、山澤玉木氏 (利尻自然ガイドサービス) にご協力いただいた。英文校閲は Ronald L. Felzer 氏 (Merritt College) による。その他、黒川健一氏 (利尻愛山会)、山谷文人氏 (利尻富士町教育委員会) には碑の由来



図2. 甘露泉の石碑。a: 表, b: 裏。

や解読などについてご意見や情報をいただいた。これらの方々には心から感謝を表す。

1 (図1-1, 図2)

場 所 : N45° 13' 11.2" E141° 13' 03.2"

大きさ : 69×15.5×17cm

碑 文 : 表「甘露泉」(図2-a), 裏「昭和十季七月順厚立之」(図2-b)

備 考 : 建立は1935年7月と記されている。現在のように北麓野営場から始まる鴛泊登山ルートでは甘露泉水がルート上にあるが、旧登山道と言われている鴛泊市街から始まる建立当時の登山ルートでは、この水場に立ち寄るためにはルートから一端はずれる必要があった (俵, 1960)。利尻山では数少ない水場なので多くの登山者が立ち寄ったと思われるが、一原 (1960) において『甘露水の石柱』と紹介されるまで、本石碑についての古い記述は筆者らの調査では見つかっていない。

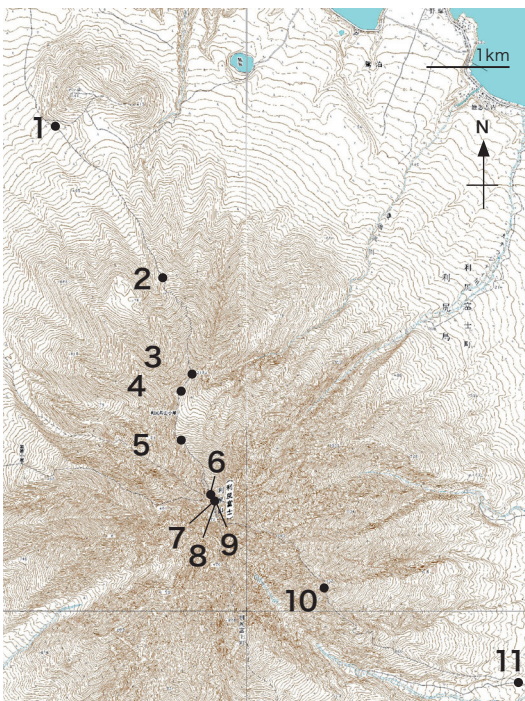


図1. 本調査で確認された石碑など。数値地図25000 (地図画像)「稚内」(国土地理院) をもとに作成。数字は本文の数字に対応する。



図3. 鴛泊ルート5合目と6合目の間にある巨石の刻印。

なお、碑文にある「順厚」はおそらく鴛泊にある妙海寺創立の住職であった中村順厚氏と思われるが、具体的な建立の経緯などの記録は知られていない(武井, 1985)。古川恭司氏(鴛泊)によると、石碑の作成については同氏の父であり、石工を営んでいた古川松次氏(明治15-16年生まれ)の手によるものであることが伝えられており、当時の利尻は名勝などがほとんどなく、その一つとしてこの場所が選ばれ、甘露泉の石碑が建てられた可能性も示唆された。

2 (図1-2, 図3)

場所: N45° 12' 14.6" E141° 14' 02.0"

大きさ: 2.4×2.6m (刻印部分は 20×30cm)

碑文: 不明

備考: 5合目と6合目の間に登山道を遮るように横たわる大きな石があり、登山中の者が見えるように縦書きにて「右サ」とも読める二文字が薄く彫られている。ただし、「右」は「石」にも見え、この二文字だけでは意味をなさないため、筆者らの読み間違いや、未完成の刻印等の可能性も考えられ、今

後更なる調査が必要と思われた。

3 (図1-3, 図4)

場所: N45° 11' 37.3" E141° 14' 17.1"

大きさ: 全体(正面) 132×80cm, 裏面の碑文のスペース (1)「昭和・・・」87×24cm (2)「杉本・・・」10×26cm

碑文: 表「利尻岳登り登れば口雲湧きて谿間遙けく口駒鳥乃鳴く 幡川詠」, 裏「昭和八年六月」

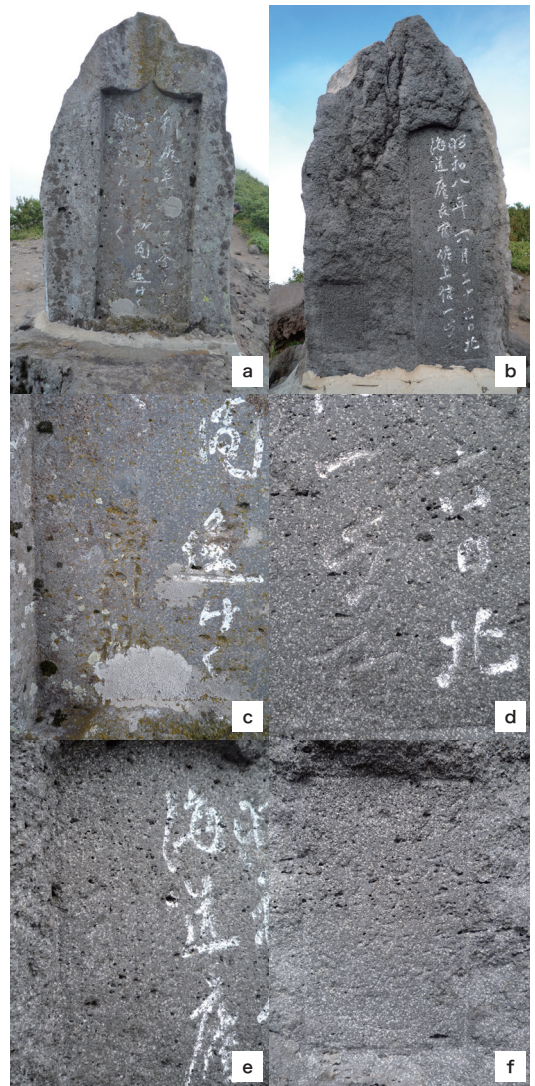


図4. 長官山の句碑。a:表, b:裏, c:「幡川詠」とされる文字, d:裏面の「佐上信一」以下の判読不明文字, e: dに続く判読不明文字, f:裏面の左隅に彫られた不明文字。

ている(時雨, 1948; 安田, 1991). 安田(1991)が紹介する「利尻富士登山縁起」による利尻山開道の伝承によれば, 開道を行った僧侶は不動明王を彫り, 山頂の祠に納めたとされており, さらに記念として, 弘法大師・薬師如来・帝釈天の碑を銘刻し『賽ノ河原ヲ模擬』したという. ところが, 時雨(1948)では帝釈天を除いた2つの碑しか記されておらず, 諸説が混在する. しかし, いずれの場合であっても, 「薬師如来の碑」については, 石碑銘が現在でも明確に判読できることや, 「薬師山」と昔呼ばれていた長官山に近い丘に設置されていることなどから, 本石碑が上記文献に記されている「薬師如来の碑」に該当すると考えるのは妥当なことと思われる. 本石碑の裏面には『行者』と記されているが, これが刻印した本人を示すものかどうかは不明である.

5 (図 1-5, 図 5-c, d, e)

場 所: N45° 11' 12.5" E141° 14' 11.4"

大きさ: 100×190cm

碑 文: 登山道に向いた表面には碑文は認められず, 右側面には文字らしきものが彫られているように見えるが, 刻印も非常に浅く, 判読不明である. 裏「大正十式年八月口若松右太郎 六十一才口同治作 十二才」.

備 考: 本石碑は狭卵形の自然石が利用され, 表面および裏面, そして2つの側面から形成されている. いくつかの文献において「薬師如来の碑」とともに「弘法大師の碑」があるとされていることから(北海道廳内務部, 1897; 岡崎, 1926; 時雨, 1948; 安田, 1991), 本石碑を「弘法大師の碑」とする説もあるが(利尻富士町教育委員会, 2006), 以下の理由からその判断にはいくつかの疑問が持たれる.

まず, 安田(1991)で紹介されている「利尻富士登山縁起」では碑文が彫られていると書かれているが, 本石碑には「薬師如来の碑」にあるような明確な碑文が見られない. 石碑には大きな欠損部があるようにも思えず, 同じ時期に同じ建立者たちによって設置されたのであれば, おそらく「薬師如来の碑」と同じような明瞭な碑文が彫られた石碑と

なっている可能性が高いはずである. 本石碑の側面には薄い刻印が認められるが, 残念ながら弘法大師に関連した碑文かどうかは判別できない.

また, 本石碑には文献上建立されたとされる明治時代とは異なる年代と弘法大師とは無関係な碑文が裏に刻印されている(図 5d). 利尻山が開道されたことはおそらく当時でも島内に瞬く間に広まった出来事であったと思われ, それに関する宗教的な石碑が山中にあったとすれば, その裏に本石碑にみられる登山記念のような名前を彫る行為は多くの島民が慎んだものと想像される. 牧野(1906)によれば, 1903(明治 36)年の登山記録には『島の人に尋ねても, 利尻山は信心にて詣る人が日帰りに登る丈けのことで, 道も素より悪いし, . . .』とあり, 信仰心から登る人であればこそ, 開道に尽くした僧侶の手により作られた「弘法大師の石碑」に自らの名前を彫るようなことはなかったと思われる.

最後に, 本石碑は「薬師如来の碑」から比較的近く, 標高 1325 m に位置するが, 以下の文献による距離や周囲の植生などが合致しない.

標高については, 北海道廳内務部(1897)では標高 1550-1600m に, 時雨(1948)では『標高五千尺』のところにありとされ, 標高約 1500m を示している. 本石碑は 1325m の標高にあり, 誤差があったとしても 100m 以上低い位置にあたる. また, 北海道廳内務部(1897)では「薬師如来の碑」から「弘法大師の碑」は 500 尺ほど標高が高いと判断できる記述もあり, それに従えば現在の薬師如来の碑(標高 1250m)から約 150m ほど高い標高 1400m に位置することになり, いずれにしても本石碑の位置は過去の文献のものより低い標高にある.

植生については『このあたりは樹木全く生育せず, たゞ小さな草が茂つてゐるのみである』『人々からはお花畑と呼ばれてゐるのも全くである』『その主なものは, 「みやまぬかば」「みやまりんどう」「りしりわうぎ」「うめばちそう」「ちしまつめぐさ」「ちしまりんどう」「かはらなでしこ」「みやまいけいそう」「そぞつづじ」「えぞやまぶきしようま」などである』という記述が時雨(1948)には見られる.

なお、後半の植生の記述は、川上（1900）が記す「大師山」の部分と完全に一致しており、時雨（1948）が川上（1900）を参照していることにも着目すべきであろう。本石碑の周辺はミヤマハンノキやハイマツなどの低灌木に覆われた場所であり、上述の植生とは明らかに異なる。特にリシリオウギやチシマツメクサ、チシマリンドウなどは本石碑が位置する場所よりも明らかに高い標高でなくてはその分布は見られない。

以上の理由から、碑文が確認できない現時点では、本石碑を積極的に「弘法大師の碑」として認めることはできず、おそらく本石碑より上部に本来の「弘法大師の碑」があるものと筆者らは考えている。これまでの調査で碑が発見できない理由としては、登山路の変更や、当時は草本植生により安定し

ていた場所に建てられていた石碑が、山体や登山道の崩壊などによる草本植生の後退とともに、不安定なスコリアの裸地へと変化し、石碑の埋没や移動、さらには谷への転落が起きたのではないかと想像された。今後は標高1400mから1600m付近の岩塊斜面などの調査を行い、「弘法大師の碑」の発見を試みたい。

なお、裏面に刻印された若松右太郎氏と若松治作氏については、古川恭司氏および鈴木祐尚氏の調査により、かつて鴛泊に在住していた大工であったことが確認されている。

6 (図 1-6, 図 6, 7)

場 所：N45° 10' 51.8" E141° 14' 26.9"

大きさ：文字の大きさは高さ 28cm×幅 15cm



図 6. 種子が刻印されていた巨石。a：全体（○の部分に刻印）、b：刻印。

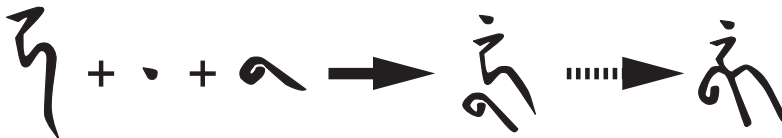



図 7. 「愛染明王」の種子の形成と石碑に彫られた刻印の関係。

碑文： (愛染明王)

備考：これまで知られていなかった碑であり、本調査により筆者の一人である佐藤が2009年に発見した。利尻山の石碑に彫られた碑文の多くは漢字で彫られているが、この碑文は北西を向く一文字の梵字からなり、幅約9m、奥行き約3メートルの巨岩の岩肌に直接刻印されている。明らかに利尻山に見られる他の石碑とは異なる様相を呈し、梵字などの知識がある者によって彫られたものと考えられる。彫られた梵字については三谷健容氏（立正大学仏教学部仏教学科）が解読を試みた結果、種子（しゅじ：梵字の一字で仏像を表示したもの）のひとつであり（中村ほか、1980）、『本来は^hに^oを付けてū音の^hを加え、^hとあるべきところを^hとついでしまったため読みにくくなったもの』と推測され（三谷、私信；図7）、「愛染明王」であることが判明した。三谷氏によると、愛染明王は不動明王と対で安置されることが多く、その点からもあきらかに利尻山開道で祀られた不動明王などを意識して刻印されたものではないかと考えられる。開道された時に彫られたとされる「薬師如来の碑」が漢字で彫られていることに対して、本石碑は梵字で刻印されていること、比較的頂上に近い場所に彫られていること、発見時には固着状地衣類に刻印は覆われ、近年彫られたものとは考えられないこと、などからも、この刻印は開道に至った修験者自身が山頂に留まり刻印したものの可能性が高いと想像された。残念ながら、現在の年代推定技術では非破壊的な推定は難しいため、具体的な刻印の年代推定はできないが、明治後期の利尻山開道の言い伝えを示す、数少ない物的証拠の一つになるものと筆者らは考えている。その一方で、利尻山開道以降も幾人かの修験者等が入山し、刻印等が彫られた可能性も常磐井武祝氏により指摘されており、今後はそれらの記録との照合など、より詳細な調査も必要と思われた。

なお、本刻印がある岩は親不知子不知上部の崩壊地の直上に位置するため、将来的にはトビウシナイ沢に崩落する可能性が高く、なんらかの保全がされることが望まれる。



図8. 山頂に残された碑(a-b)と台座(c-d)。a:2009年では、2つの分離した破片となって、山頂の祠の前に横に寝かされた状態で置かれている。b:1990年代初めの写真では、現在と同じ破片のみであるが、破片が修復された状態で、祠の北側に立てられていた。c:台座のみが祠の横に残る(2009年撮影)。2010年にはこの石はどこかに移動され確認できなかった。d:台座の形が半円形である石(2010年撮影)。



図9. 鬼脇登山路にある慰霊碑. 1963年の遭難事故(a:全景, b:石版), 1972年の遭難事故(c).

7 (図1-7, 図8-a, b)

場 所: N45° 10' 49.5" E141° 14' 29.2"

大きさ: 2つあわせた状態で計測, 23.5×115cm

碑 文: 「■天堅(堅)嶽」

備 考: 1990年頃の写真(図8-b)によると, 破損した碑を漆喰で補強し, 山頂に立てられていたことがわかるが, 2009年現在では既に倒れ, 2つに分割した部分のみが山頂の祠前に横たわっている. 常磐井武祝氏によると, 1990年以前には破損もなく, 全部で4文字が刻印されており, 最初の一文字は梵字であり, 残り3文字が「天堅(堅)嶽(てんけんだけ)」だったという. 本石碑の設置年代や由来については不明である.

8 (図1-8, 図8-c)

場 所: N45° 10' 49.5" E141° 14' 29.2"

大きさ: 未計測

備 考: 岩に正方形の凹みが彫られており, 木製の

柱などをそこに建てていたものと考えられる. 古い山頂の写真により, 年代によってそれぞれ異なる細長い木製または石製の碑が山頂付近に建てられていたことが伺えるが, 2010年現在, それらのほとんどが失われており, 今後の調査の大きな課題のひとつと言える. なお, この台座の石は, 鈴木祐尚氏所蔵の写真により, 1983(昭和58)年には既に台座のみとなって山頂に放置されていたことが判明している.

9 (図1-9, 図8-d)

場 所: N45° 10' 49.5" E141° 14' 29.2"

大きさ: 26×26cm

備 考: 上記と同様に岩に半円形の凹みが彫られており(9×7cm), 木製の柱などをそこに建てていたものと考えられる.

10 (図1-10, 図9-a, b)

場 所：N45° 10' 16.7" E141° 15' 27.9"

大きさ：未計測

碑 文：「一九六三年五月□北の地にゆきし□篠崎
根岸 両君よ□君の志は□今もなお□たくましく□
引きつがれて□いる□永遠に□心安らけく□ねむり
□たまえ□一九七二年九月□東武山彦山岳会」

備 考：利尻富士町史編纂委員会（1998）には、
『1963（昭和38）年5月に鬼脇南稜にて埼玉県西
武鉄道職員二名遭難不明』とあり、それに対する慰
霊のプレートと思われる。

11 (図 1-11, 図 9-c)

場 所：N45° 09' 40.8" E141° 17' 12.6"

大きさ：台座部分（130×130×90cm），上段プレ
ート（61×16cm），下段プレート（42×31cm）

碑 文：「利尻岳←登山道→鬼脇」「安全登山の願
い□一九七二年二月一日四日厳冬の石崎沢にて逝け
し高野貞雄 加藤政雄両君□にお寄せ戴いたご好意に
感謝しこの清く□美しい利尻岳から遭難を無くする
願い□をこめて。合掌。□一九七二年九月□長岡ハ
イキングクラブ□さいはての利尻の島の人々の□あ
つき情に涙こぼる□父 高野権二郎□こ、利尻の
山に青春をかけた政雄よ□万感情をこめ永遠に安ら
かなれと□父 加藤栄一」

備 考：石を固めて作られた台座に、銅板と思われ
る金属製プレート2つがはめ込まれており、厳密に
は石に彫られた碑ではないが本稿に含めた。現在の
鬼脇登山口に設置されており、1972（昭和47）年
2月14日に石崎の沢で起きた重傷1名、死者2名
を出した遭難事故の慰霊碑と思われる（利尻富士町
史編纂委員会、1998）。

参考文献

北海道廳内務部、1897. 利尻山観測記 全. 北海

道廳内務部農商課. 秀英舎. 東京. 59pp.

一原有徳、1960. 北海道の山. アルパイン・ガイ
ド 11. 山と溪谷社. 213pp.

上遠野福寿、1967. 観光利尻. 旅館・大須賀. は
まなす社. 札幌. 35pp. (自刊)

川上瀧彌、1900. 利尻嶋ニ於ケル植物分布ノ状態.
植物學雑誌, 15(158): 77-83, 15(159): 99-112.

牧野富太郎、1906. 利尻山と其植物. 山岳, 1(2):
25-36.

中村瑞隆・石村喜英・三友健容、1980. 梵字事典 (三
版). 雄山閣. 東京. 492pp.

岡崎茂治、1926. 利尻富士登山紀行. ヌプリ, (3):
26-29.

鴛泊村役場・鴛泊村観光協会、1948. 昭和二十三
年版. 利尻郡鴛泊村勢概要.

利尻富士町教育委員会、2006. シリーズ～石碑7.
文化財だより ポンモシリ. No. 7. 利尻富士町
教育委員会.

利尻富士町史編纂委員会、1998. 利尻富士町史.
利尻富士町. ぎょうせい. 1583pp.

利尻郷土史研究会、1986. 利尻の石碑. 利尻郷土
研究第2号. 利尻郷土史研究会. 49pp.

時雨音羽、1948. 島ものがたり. 宗谷観光協会.
606pp.

宗谷支廳、1935. 宗谷支廳管内概況. 札幌印刷工
藝社.

武井順明(編)、1985. 雁の教聲. 浄然寺. 238pp.

俵 浩三、1960. 利尻の山. 札幌山岳クラブ(著),
北海道の山々 マウンテンガイドブックシリー
ズ 39: 199-204. 朋文堂. 東京.

俵 浩三、2006. 阿寒・大雪山以降の北海道の国立・
国定公園. 国立公園, (641): 4-9.

安田みきほ、1991. 不動尊像と利尻岳開山のはじ
まり. 利尻郷土研究, (5): 14-25.